

いなぎ きゅうせつ きじだい
稲城の旧石器時代

稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 2006. 2. 20



旧石器時代の生活復元図（東京都埋蔵文化財センター提供）

人類が地球上に誕生してから、長い進化の過程をたどり、高度な知識を持った現生人になるまでの時代を旧石器時代といいます。今から約5百万年前から1万年前頃までの長期間にわたり続きました。この時代の日本列島は火山活動が活発で、各地で火山灰が降り注いで赤土（ローム層）として堆積しました。現在より寒冷な気候で、氷河が発達した時代なので、氷河時代とも呼ばれています。ヒトは食糧や住みやすい土地を求めて移動生活を行い、定住的な住居や集落をつくることはありませんでした。

関東地方に見られる赤土は、富士山や箱根山の火山灰が堆積した関東ローム層といわれる地層です。この赤土のなかに見られるのが旧石器時代の文化です。関東ローム層は地表に近いところから、立川ローム（約1万年～3万年前）、武蔵野ローム（約3万年～6万年前）、下末吉ローム（約6万年～13万年前）、多摩ローム（約30万年前）の4種類に区別されています。旧石器時代の遺跡のほとんどは、この関東ローム層のなかの立川ロームから発見されます。ローム層の中から発見される石器のほとんどは打製の石器で、礫器、握槌、尖頭器、細石器、ナイフ形石器、石刃、彫器、削器などの種類があり、食糧となる動物（オオツノ鹿や野牛など）の狩猟や肉の調理・加工、木や骨の道具の加工などに使われました。

稲城の地では、坂浜や平尾の丘陵地や台地に関東ローム層が堆積しており、このなかの立川ロームの地層から、14か所の旧石器時代の遺跡が発見されています。これらの遺跡のほとんどは、多摩ニュータウン

建設に伴う調査で明らかになったもので、三沢川流域の坂浜地区に集中しています。ほとんどの遺跡は、多摩丘陵の丘陵上から発見され、数点の石器が出土しただけの小規模な遺跡で、出土した石器の形状から今から約2万年前から1万3千年前の時代であることが判りました。

稲城の旧石器時代遺跡のなかでもやや規模が大きいのが坂浜遺跡です。場所は三沢川右岸の段丘上で、稲城第二小学校の西南側（坂浜274番地）にあたります。昭和43（1968）年に国學院大學考古学研究室によって発掘調査が行なわれ、19点の旧石器が出土しました。その内訳は、ナイフ形石器2点、石刃6点、彫器1点、剥片10点です。ナイフ形石器は肉の調理・加工用の道具、

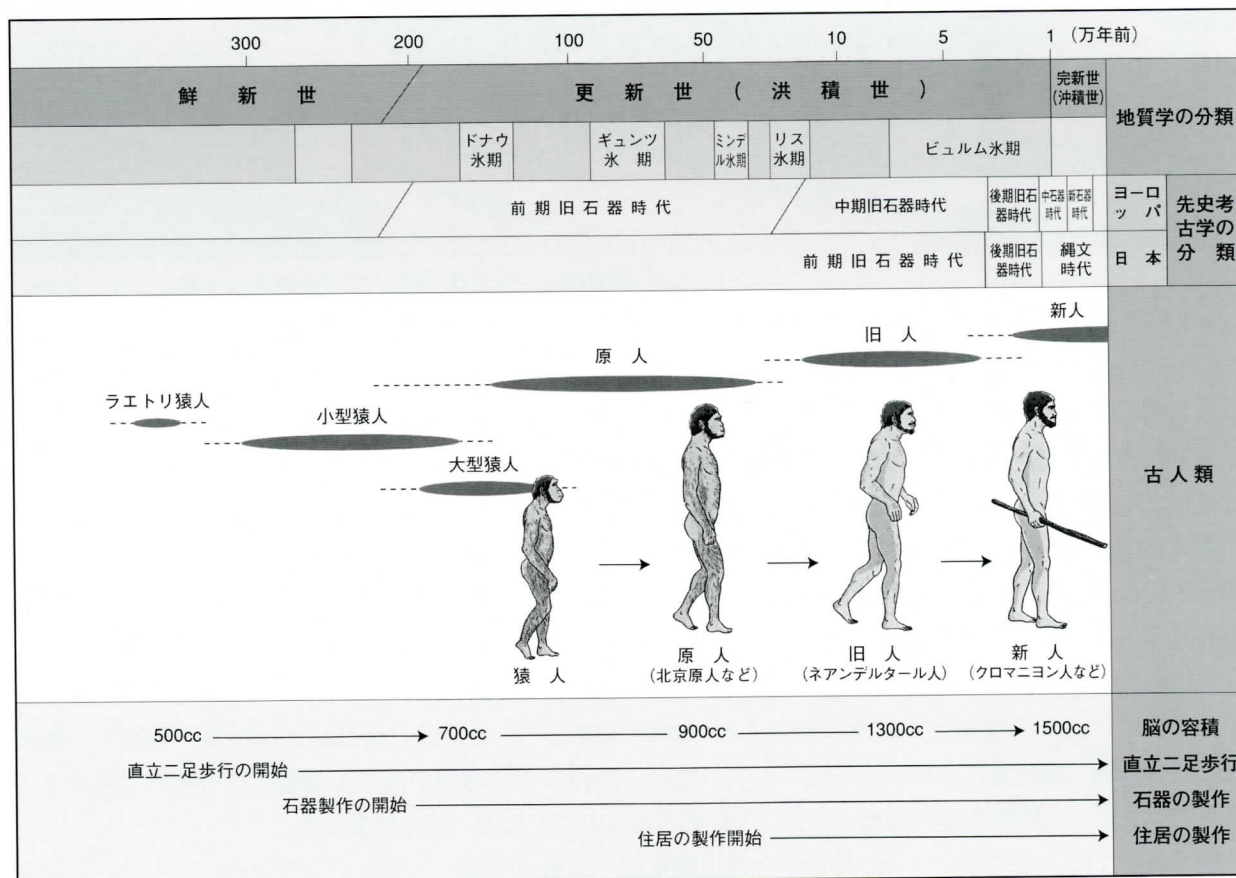


坂浜遺跡出土の旧石器

石刃は物を切ったり削ったりする道具、彫器は物を削ったりする道具で、剥片は原石を剥がして作った製作途中のものです。石質は、黒曜石と安山岩各1点のほかはすべてチャートという石材でした。これらの石器の時期はナイフ形石器文化の後半期に位置づけられ、今から約1万7千年前から1万5千年前に使われたものであることが判りました。坂浜の三沢川に近い段丘上で、食糧を求めて丘陵の中を移動し、動物の狩猟活動を行っていた旧石器時代の人々が遺した石器でした。

今から約1万2千年頃になると、長い氷河期が終わって気候が徐々に暖かくなり、自然環境も変化してきました。やがて土器づくりが始まり、旧石器時代から縄文時代へと移行することになります。

参考文献 『稲城市史上巻』（稲城市）、『稲城のあゆみ』（稲城市）



旧石器時代の時期区分表